

農作物技術情報 号外 大雨事後対策

発行日 令和8年8月3日

発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部

編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://i-agri.net/Index/gate002>」

7月31日から8月2日にかけて、各地で大雨に見舞われ、ほ場への浸冠水や湿害の発生、土砂流入など農作物への被害が発生しています。また、7月下旬から降雨が続く軟弱気味の生育となっており、病害が発生しやすい状態となっています。

排水対策や病害対策を中心に作目やほ場の状況に応じて適切な対策を講じてください。

農作業安全

事後対策等は安全を確認してから！

- (1) 現在、道路が通行止めとなっているところがあります。被害確認のためのほ場の見回りや事後対策を実施する際は、河川の増水中やほ場が浸水している時は危険なので近づかないでください。また、土砂崩れなどの恐れがある場所へは、安全が確保されるまでは立ち入らないでください。
- (2) ほ場に入る際には、作業道等がぬかるみ、路肩が崩れやすくなっていることが考えられます。農業機械が横転する危険がありますので、作業時には十分に注意してください。

水 稲

速やかな排水とほ場管理を万全に！！

県内の水稻は出穂期を迎えているところが多く、浸水や冠水した場合は、稔実歩合や登熟歩合の低下等の被害を受けやすい時期となっています。特に濁水（泥水）が流入した場合、冠水時間が長いほど減収率が高くなるため、できる限り早めの排水に努めてください。

また、いもち病などの病害にかかりやすい稲体となっているため、退水後、ただちに殺菌剤の茎葉散布による防除を実施してください。

(1) 水管理

- ・ 流入した濁水等を速やかに排水し、新しい用水と入れ替えます。
泥が大量に流入した場合は、排水後に速やかにほ場の周縁部及び条間に、泥をかき分けるように溝をきり、新しい用水が均一にゆきわたるようにしてください。
- ・ 冠水したイネは、水分を消耗しやすくなっていることから、排水後、出穂開花期までは水を切らさない管理とします。なお、高温時は、稲体の消耗を抑えるため、積極的な水の入れ替え（夜間かんがい）を行ってください。

(2) ゴミ・堆積物等の撤去

- ・ ほ場の排水口・排水路にゴミなどが詰まった場合は、速やかな排水に支障をきたすだけでなく、再び降雨があった場合にも浸冠水しやすくなりますので、速やかに除去してください。
- ・ また、必要に応じ土地改良区など関係機関と連携しつつ、早めに水路や用排水設備を点検し、機能復旧に努めます。
- ・ 泥が流入したほ場では、その後に稲体の窒素濃度が高まり、いもち病などのリスクが高まる

ので、生育回復等に向けた追肥は控えてください。また、次年度の施肥は減らす必要があるもので留意します。

- ・ ほ場内にある流木や瓦礫・土砂などの漂着物は、機械収穫などの作業に支障をきたすので、退水後、できるだけ速やかに取り除いてください。ただし、状況によっては工事等が必要な場合があるので、無理な作業は行わず、関係機関に相談した上で対応してください。

(3) 防除

- ・ 冠水した稲は病害虫に対する抵抗力が低下しやすく、特にいもち病に感染しやすくなります。このため、穂いもち予防粒剤を散布したほ場においても、退水後、直ちに殺菌剤の茎葉散布による防除を実施します。
- ・ なお、液剤で防除する場合は、葉に付着した泥を落とすように、使用基準の範囲内で散布量を多めにしてください。

大 豆

一刻も早い速やかな排水を！！

- (1) ほ場が浸水、あるいは冠水した場合は、一刻も早く排水する必要があります。ほ場内のゴミ等を除去して、土壌表面水の速やかな排水に努めてください。
- (2) 倒伏した株は、隣接する株どうしで支えあうようにするなどにより、地面に接しないよう持ち上げておきます。また、根の健全化を図るために、ほ場表面が乾いてから畦間を浅く中耕したり、乗用管理機でうね間を走行するなどして、根圏に酸素を供給します。ほ場に入れるか確認の上、慎重に作業してください。
- (3) 生育回復のために追肥を行います。速効性の肥料を使用し、追肥量は窒素成分で10aあたり6kgとします。
- (4) 湿害の影響により、大豆の生育が停滞するため、雑草害が甚大になることがあります。茎葉処理除草剤を利用して、雑草害を軽減してください。

野 菜

排水対策等を早急に行い、草勢回復に努めてください

- (1) 停滞水を直ちに排水するとともに、付着した泥土を洗い流してください。
- (2) 冠水や多湿によって病気の発生が懸念されるので、品目ごとに使用基準に従い殺菌剤を散布して予防に努めてください（特にべと病、疫病、立枯性病害など）。
- (3) 生育回復を図るため、被害葉や被害果、くず果の整理を早めに行ってください。また、整枝、誘引などの管理を徹底し、草勢の回復に努めてください。
- (4) ほ場表面が乾いたら、うね間の中耕を行うなど土壌中の空気の流通を図り、根の活性化に努めてください。
- (5) 障害の状況に応じて、液肥の葉面散布など追肥を行い、草勢の回復に努めてください。
- (6) 浸冠水や土に埋没するなどして、回復の見込みのない場合は直ちに整理し、代替野菜の作付を検討してください。秋野菜では、はくさい、だいこん、かぶ、つねな類等があげられます。は種限界の目安は次のとおりですので参考にしてください。

はくさい：県中南部8月中旬

だいこん：8月下旬

かぶ：9月下旬

つねな類・中国野菜：9月下旬

花 き

排水対策と事後の栽培管理を速やかに！！

- (1) 滞水しているほ場は、溝切りなどにより速やかに排水を促します。特に、きく類は萎ちょう症状（水焼け）が発生しやすくなるので、長時間滞水しないよう努めます。
- (2) 株が倒伏・傾倒した場合は、時間が経過するほど茎の曲がりに戻りにくくなるので、直ちに株を立て起こします。併せて、支柱やネットの緩みを修復します。
- (3) 茎葉の折損や損傷のひどい部分は、ほ場外に持出し処分します。また、ほ場の冠水や多湿、茎葉の損傷、泥の茎葉への跳ね上がりにより、病害が発生しやすくなります。品目ごとに農薬の使用基準や各地域の防除暦などに従って殺菌剤を散布します。
- (4) 薬剤散布する際は、株に付着した泥を洗い落とすため、動力噴霧機の圧力を高めにして十分量を散布します。併せて、施設栽培では換気を徹底し、施設内の湿度の低下を図ります。
- (5) 草勢が弱った場合は、液肥の葉面散布等により回復を図ります。

果 樹

被害の軽減に努めましょう

- (1) 滞水したほ場は溝を切るなどして排水に努めます。
- (2) 枝のごみ、果実の泥を排除するとともに、果実腐敗性の病害や斑点落葉病・褐斑病等を防止するために、殺菌剤を散布して感染を予防します。また、果実に腐敗等が確認された場合は速やかに取り除きます。
- (3) 斜めに傾いたり、横になった樹体は、そのまま不用意に引き起こすと、残っていた根も切ることになるので、倒れた側からスコップで少し掘り下げるなど、注意深く戻します。

飼料作物

排水対策、草勢回復に努めましょう

- (1) 滞水等している圃場は、溝切りなどにより速やかな排水に努めます。
- (2) 飼料用とうもろこしが傾倒、倒伏した場合は、無理に引き起こすと折損等のおそれがあるので立ち上がりを待ちます。
湿害等による生育不良が認められる場合は、とうもろこしの草丈等を考慮し、作業可能であれば追肥を行います。目安は、窒素 1 ～ 2 kg/10a（硫安 5 ～ 10kg/10a など）です。
倒伏したほ場で収穫を行う場合は、収穫機の走行速度を遅くし、倒れた方向に対して斜め後ろから進入します。高刈りして土砂等の混入を避け、十分な踏圧と密封に努めます。
- (3) 牧草は、圃場が乾いたら速やかに再生草の収穫を行います。土砂や異物混入を避けるため、刈取り高さは10cm以上とします。草勢を確保するため、追肥を確実にを行います。
- (4) サイレージ調製のポイントは、土砂や異物の混入防止（雑菌による変敗、発酵ロスの低減）と、十分な踏圧（空気を追い出し乳酸発酵を促す）です。材料が高水分または枯れ上がりなどにより不良発酵が懸念される場合は、ギ酸（急速にpHを低下させる）、乳酸菌製剤（乳酸発酵を促進）等の添加剤の使用を検討します。